



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	地割組・マブッチ組・ヤドゥイ 久高島村落祭祀組織 についての補遺
Author(s)	赤嶺, 政信
Citation	人間科学 = Human Science(14): 169-182
Issue Date	2004-09
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2867
Rights	

地割組・マブッチ組・ヤドゥイ —久高島村落祭祀組織についての補遺—

赤 嶺 政 信
Akamine Masanobu

Jiwari-gumi, Mabutchi-gumi, Yadui:

Supplementary Note on Village Cult Organization in Kudaka Island

本稿は、久高島の村落祭祀組織を理解するための作業として、供物の供出単位となる地割組、マブッチ組、ヤドゥイに注目し、その構成原理について検討を加えたものである。その結果、沖縄の他地域との比較のうえでの、久高島村落祭祀組織の特徴の一端を明らかにし得たと考えている。

キーワード：久高島、村落祭祀組織、地割組、マブッチ組、ヤドゥイ

一 課題

久高島の祭祀組織については、おもに門中との関わりという視点からすでに別稿で検討した [赤嶺 1983, 1993]。門中との関わりに着目したのは、以下で述べるように、沖縄における村落の祭祀組織が門中（あるいはそれに類するもの）と密接な関係があることが指摘されてきたからである。

たとえば、比嘉政夫の報告する沖縄島南部、玉城村中山部落の稲の収穫祭においては、「この祭祀に各〈ハラ〉 [門中—引用者]が参加しているシンボルとして、各〈ハラ〉の本家から〈ピン〉と呼ばれるものが出る。〈ピン〉は、二本の酒の入った燗瓶と若干の米、そして線香よりなり、それを膳にのせたものを一セットとして、(略) 各〈ハラ〉の本家の主人（例外なく〈ク

ディングァ>になっている)が持ち、他の<クディングァ>はその<ピン>を中心に動く」[比嘉 1983:131]という。これを換言すれば、門中を構成単位として村落の祭祀が行われ、各村人は特定の門中の成員であることを通してこの祭祀に関わるという構図が見てとれる。

山路勝彦によれば、同じく沖縄島南部にある佐敷町屋比久の五月ウマチーでは、「門中の成員はそれぞれの総本家に集合し、祖先の位牌等に供物を供え、子孫繁昌の祈願等を行なう。(略)その後、区長が太鼓を叩いてトゥンまわりの合図をする。村人は総本家からピンスーをもって出て、ノロをはじめとした神人の後に従ってトゥン廻りを行う」[山路 1984:642]とされる。ピンスーは、酒や花米、線香などを入れる携帯用の祭祀用具のことで、ここでも村落祭祀における村落、門中、個人の関係が、中山部落と同じ状況にあることが見て取れる。

このことが沖縄島南部に限られないことは、大胡欣一の報告する北部離島、伊平屋島田名部落の事例によって示唆される。田名部落には各門中の本家から選ばれた女性神役のハンズナがおり、ウンジャミ(海神祭)の行事において、ハンズナが海岸に行く時、馬の行列の間には、そのハンズナの属する門中の成員が本家の馬の後に一団となって従っている。この馬の手綱は本家の主人、つまりハンズナの兄弟が取るのを原則とするという[大胡 1962:43~44]。

以上の事例によって、門中が存在する地域における門中と村落祭祀との関係について一定の見通しを立てることができるが、しかし一方では、門中は土着の親族集団ではなく、近世に首里・那覇に居住する土族階層の間で成立したものが漸次周辺地域に伝播し成立したものである、というのが今日の一般の見解であり、門中不在の地域の、あるいは門中成立以前の状況についても注意を向ける必要が生じてくる。

父系の門中が成立する以前に存在した親族祭祀集団として山路勝彦が報告する渡名喜島の殿所属集団(山路の用語でヒキ集団)について見てみよう。

山路によれば、殿の所属を基盤として成立しているヒキ集団と神役継承の方式との間にはある程度の対応関係があり、さらに、シマノーシという来訪神祭祀において、ノロや根神を含む神役たちが各殿を巡るとき、それぞれの殿に所属する人たちは酒・肴を持参して殿に参集するという [山路 1967]。殿に所属することによって村落祭祀に参加する、換言すれば、殿所属集団を単位として村落祭祀組織が構成されるという構図がここでも確認できる。

松園万亀雄が報告する座間味島の父系門中成立以前の御嶽所属に基づく「家筋の門中」の場合も、ノロを含めた神役たちは、それぞれ祭祀を担当する御嶽が定まっているとされる点からすると、神役組織が「家筋の門中」を基盤にしていた状況を窺うことができそうである [松園 1970]。

宮古や八重山に目を転じてみよう。村武精一の指摘によれば、両地域には、wan, ugan, mutu などと呼ばれる ancestor-centered kin としての祭祀集団（その帰属は必ずしも父系ではない）が認められるが、これらの祭祀集団は、稲・粟などの農耕儀礼とそれをめぐる諸観念と深く結びつき、かつ、農耕儀礼は村落レベルの祭祀組織と固く結合しているという [村武 1965]。

以上を踏まえると、村落の祭祀組織がその下位単位として何らかの祖先中心的親族（祭祀）集団（父系門中、家筋の門中、ヒキ集団、その他）によって構成されるという状況は沖縄のほぼ全域に亘って見出される、と、大雑把な見通しとしてはあるが、言えるであろう。比嘉政夫は「奄美から先島にわたって分布する神役組織は、村落のなかの特定の家（草分け筋の家とか、お嶽などの聖地の起源伝承を背負った家など）を中心としたいくつかのヒキ集団（父系へのかたよりをもった血筋、家筋、ヤシキ筋など帰属方式に変差がある）を代表するかたちで選出され、特定の役割を分担し村落やヒキ集団の祭祀の運営の指導的立場に立つ」と概括している [比嘉 1983: 18~19]。

久高島の門中制を検討するにあたって筆者の問題意識の背景にあったのは、如上のことがらであった。本稿では、それを受けて、先述の拙稿では触れることができなかった地割組、マブッチ組、ヤドゥイに注目する。いずれも家

の集合で、特定の村落祭祀において、これらの「組」が供物の供出単位となる場面が見られるからである。

二 供物の供出単位

供物供出の具体的状況について、麦と粟の初穂祭および収穫祭の場面から押さえておきたい。麦・粟の初穂祭は、前者が正月マティ、後者が五月マティと称され同一の祭祀形態で行われ、また収穫祭は、前者が三月マティ、後者が六月マティと呼ばれやはり同一の祭祀形態で行われている。祭日はその月のミンニー（壬、癸、甲、乙）の日が選ばれ、〈外間〉（外間拝殿）とウドゥンミャー（御殿庭）と呼ばれる祭場を中心に執り行われる。

麦・粟の初穂祭と収穫祭に共通する供物としてミキ（神酒、ウンサクとも）があるが、それは地割組を単位として供出される。また、収穫祭では、地割組からターチャーメー（炊いた飯？、ンパイともいう）と呼ばれる麦あるいは粟の飯（現在は米で代用）も供出される。

収穫祭の前日のウハチアギ（御初上げ）の儀礼では、ミアムトゥと呼ばれる〈外間〉、〈外間ノ口殿内〉、〈久高ノ口殿内〉の3カ所のムトゥにターチャーメーが供えられるが、それは、村頭（村落祭祀に係わる世話係）が各家からその家に配分されている耕作地の所有高に応じて、たとえば一地（後述）につき米2合といったかたちで集めたもので作られる。

麦・粟の4つの祭祀以外に地割組が供物の供出単位となる祭祀として、11月に行われるフバワクがある。

なお、明治32～36年の土地整理事業に際し久高島の地割制が廃止されなかったことに関して、伊波普猷が「島中の男子が集会して、共有地を分配して私有にする決議をしたところが、後で島中の女子が集会して、神代以来の制度を変更するのはよくない、その上土地は古来女が関係して来たものゆえ、男子が勝手に処分する道理はない、といて、男子の決議を取消させて、もと

の通り共有にしたことがある」[伊波 1975：51]と述べているが、如上のように地割制が村落祭祀と一定の関わりを有していたことも、この制度の存続を促した要因の一つとなった可能性がある。

麦・粟の初穂祭では、神酒の他にマブッチと呼ばれる米を固めの粥状に炊いたものも供物となる。かつてのマブッチは、石臼で挽いた麦や粟の粉を炊いたもの（蒸したもの、という報告もあり）であったという。マブッチは何軒かの家が組を構成して供出するが、ここではそれを便宜上マブッチ組と呼んでおく。

ヤドゥイが関わるのは、11月に行われるアミドゥシという行事である。アミドゥシでは、70歳以下の男たちが徳仁の浜にヤドゥイ（宿り）と呼ぶ7つの小屋を立て、そこに寝泊まりして追い込み漁を行う。参加する男たちは所属するヤドゥイが家ごとに決まっており、ノロたちを招いて行われる浜での祭祀において、供物となる神酒とンバイ（握り飯）はヤドゥイ単位に供出される。アミドゥシの儀礼過程の詳細については別稿[赤嶺 1998：117～128]で述べたので参照願いたい。

以上、地割組、マブッチ組、ヤドゥイが供物の供出単位となっている状況を見てきたが、一方では、家やショーニン（正人）と呼ばれる16から70歳までの男子が単位となって供物が供出される祭祀も少なくないことを確認したうえで、先に進みたい。

三 組の構成原理

以下では、供物の供出単位となる組の構成原理について見ていきたい。

まずは地割組についてだが、それを述べるためには久高の地割制に関する概説が必要である。地割の対象となるのは、畑地の中からノロ地などの役俵地を除いた部分でワク地（ワクの語義は不明）と称されている。ワク地はヂーグミ（地組）あるいは単に組と呼ばれる10組に配属され、10の組には、それ

ぞれスルバン組、ハーニー組、ウブシ組、ナカタナカ組、トゥキヤ組、イビンミ組、メーンシム組、ヤブヤ組、ハーヌイー組、グスク組の名称が付く。組名の中には屋号と同一のものもあるが（スルバン、トゥキヤ、イビンミ、メーンシム）、その屋号の家と地割組との間に特別の関係があるわけではなく、地割組の命名の由来は不明である。各組に配属された畑地はさらに15等分され、この15分の1がチュヂー（一地）と呼ばれる各家（人）に配分される単位となる。各組は原則として15軒によって構成されることになる。それぞれの組には「組の親」と呼ばれる世話役がいて、組に所属する家が1年任期の輪番制で当たっている。また、神酒を作る当番の家をミキアタイと称し、同じく輪番制（1回の祭ごと）で当たる。

土地の配分方法は、戦前までは、毎年1月4日にシンユエー（新寄合）という集会在バンジュ（番所）と呼ばれる部落内の小広場で持たれ、そこにおいてその年度の各戸の土地の配分が決められたという。男子16歳になると一地を得る権利を有し、一定の年齢（50、60、70歳と諸説ある）に達するとそれを部落に返却するのが原則となっていたといわれる。

さて、土地の配分にあたって、家によって特定の組の土地の配分を受けるといった規則はなく、したがってこのような配分方法による地割組の家構成には、地縁、血縁いずれも関与することがなかった点に注目しておきたい。

なお、〈外間〉と御殿庭のどちらの祭場に供物を出すかは組によって定まっているが〔比嘉 1993：11〕、それについて特別の意味付けがなされることはない。さらに、収穫祭のときに御嶽に供える神酒は、メーンシム組から出されたものと決まっているが、その由来は、メーンシム組が神酒造りに秀でていたから、という話が聞かれるのみである。

次にマブッチ組について見てみよう。表1は、12あるマブッチ組について、それぞれに所属する家を示したものである（ローマ数字を付した組番号は便宜的に付けたもの）。確認できなかった家が若干あって完全なものではないが、一般的傾向を窺うためにはさしあたって問題はないと思われる。転出や

表 1. マブッチ組とヤドゥイの構成

※父系関係が認識されている家を同一の番号で示す。

マブッチ組	屋号	門中(父系関係)*	ヤドゥイ
I	ウブンシミ	1	トウヌチ
	メーウブンシミ	1	"
	久高ノロ殿内	2	"
	ミンダカリ	2	外間
	越後來	2	ンナントウ
	メーダカリ	2	外間
	アガリンヤ	3	"
	四男アガリンヤ	3	"
	ブシーヤ	3	"
	大里小	3	?
	ミンダカリ小	4	チバイ
	ホウエイヤ	4	"
	東内間	5	ンギャナ
	新内間	5	"
	イッチャンヤ	5	"
	前内間	5	"
	ニライ	5	"
	浜前崎	6	"
	前前崎	6	"
	薬屋	7	"
ユナンミ小	8	トウヌチ	
二男前ノ下茂小	9	"	
II	三男前伊茶利小	10	メーマ
	竹次ヤ	10	"
	チマリヤ	11	チバイ
	東チマリヤ	11	"
	江口	11	"
	宮平	12	トウヌチ
III	外間ノロ殿内	13	外間
	ヌンドウチ小	13	"
	ナカン外間	14	"
	官助ヤ	14	"
	スーヤ	15	"

マブッチ組	屋号	門中(父系関係)*	ヤドウイ
IV	ナサーヤ	6	外間
	イピンミ	6	"
	イシグルミ	16	ンギャナ
	長ーヤ	17	"
	長昌ヤ	17	"
	ゾーチマ	17	"
V	東ン門	18	ンナントウ
	ニープ門	18	"
	平五郎ヤ	18	"
	新家小	18	ンギャナ
	前新家	18	"
	東西銘	19	ンナントウ
	チュンナーヤ	19	"
	東金ヤ	19	"
	東伊奈利小	20	外間
	ムリンザトウ	21	"
	カンロー大里	22	トウヌチ
	前越來	23	"
VI	ウイチマ	24	トウヌチ
	イケヤ	9	メーマ
	サンナバ	25	ンギャナ
	浜ミンダカリ	24	トウヌチ
	神谷	26	メーマ
VII	ムトウヌ福治	27	ンギャナ
	マチヤ福治	27	"
	スーマイ	28	"
	サブシ	29	ンナントウ
VIII	外間	6	外間
	台湾外間	6	"
	新外間	6	"
IX	前西銘	30	トウヌチ
	前西銘小	30	"
	二男前西銘小	30	"
	三男前西銘小	30	"

地割組・マブッチ組・ヤドウイ

マブッチ組	屋号	門中(父系関係)*	ヤドウイ
IX	仲西銘	30	トウヌチ
	後西銘小	30	"
	新西銘	30	"
	西西銘	30	"
	前トウキヤ	31	"
	西トウキヤ	31	"
	シンジャナ小	29	ンナントウ
X	前伊茶利小	10	メーマ
	四男前伊茶利小	10	"
	二男前伊茶利小	10	"
XI	前外間	6	外間
	新伊茶利	6	"
	東門	6	"
	三男前伊茶利	6	"
	ジラ小ヤ	6	"
	新伊茶利小	6	"
	前ン下茂	9	メーマ
XII	グローヤ	9	"
	ハンジャナ	32	"

絶家の家も、確認できたものについては表に示してある。

マブッチ組の構成について人々に問うと、ほとんどの人が構成のあり方を不思議がる。今日、分家した男子は父方の組に属するのを原則とするが、表で明らかなように父系関係にある家が別々の組に属していたり、父系関係のない家が同じ組を構成したりしているからである。たとえば、伊茶利門中(6)の例で見ると、マブッチ組の所属はI、IV、VIII、XIの4つの組に分散している。別の例で見ると、II組の〈三男前伊茶利小〉と〈竹次ヤ〉は、父系関係に準ずるとすれば他の3軒とともにX組に所属すべきであるが、そうはなっていない。

組によっては、構成する家間の関係がある程度推測できるものもある。VI組は、屋敷が隣接する5軒の家によって構成されており、地縁的原理が作用

しているものと推測される。ただし、この組は現在機能しておらず、〈イケヤ〉のみが最近になって父系関係にある家が所属するⅫ組に加わるようになった。また、Ⅶ組の〈サブシ〉が〈福治〉系と同じ組に属しているのは、〈サブシ〉がかつて〈マチヤ福治〉の隣の屋敷に住んでいたためだろうと考えられているが、定かではない。Ⅰ組の〈ユナンミ小〉は、〈ウブンシミ〉から婚入した人がいたために〈ウブンシミ〉と同じ組に属する、という伝承も聞けた。

また、先述したⅡ組の〈三男前伊茶利小〉と〈竹次ヤ〉については、つぎの背景を考慮したい。図1で示したように、〈並里小〉に〈前伊茶利小〉の三男がイリムーク（入り婿、婿養子）となっている。上位世代の系譜関係からしてかつての〈並里小〉は〈チマリヤ〉系（Ⅱ組）と同じマブッチ組であった可能性が高く、現在の〈三男前伊茶利小〉（〈並里小〉と呼ばれることも多い）と〈竹次ヤ〉はそれを引き継いだものかと推測される。

Ⅰ組の〈浜前崎〉は、父系関係では〈伊茶利〉系（6）であるが、〈伊茶利〉系によって構成されるⅪ組には属していない。その背景として、かつて〈伊茶利〉系の家から〈浜前崎〉に他系（非父系）養取が行われたことが確認できるので、〈浜前崎〉はこの養取以前の〈浜前崎〉のマブッチ組所属を継承したものである可能性が高い。また、Ⅳ組の〈イビンミ〉も〈伊茶利〉系であるにもかかわらずⅪ組ではない。これについては、現在の〈イビンミ〉は〈イビンミ〉と呼ばれていた空き屋敷へ入居した事実が確認できるので、旧〈イビンミ〉のマブッチ組所属を継承している可能性が考えられる。

このように、かつてのマブッチ組への所属は、父系を基本にしながらも、他系からの養取や婿養子があった場合には、父系にこだわらない家筋による所属があったことが想定される。

ところで、初穂祭でマブッチを〈外間〉および御殿庭のいずれの祭場に供出するかは、地割組の場合と同様に組によって定まっているが、その意味について明瞭に説明されることはない。また、Ⅰ組では各家から米を集めてマ

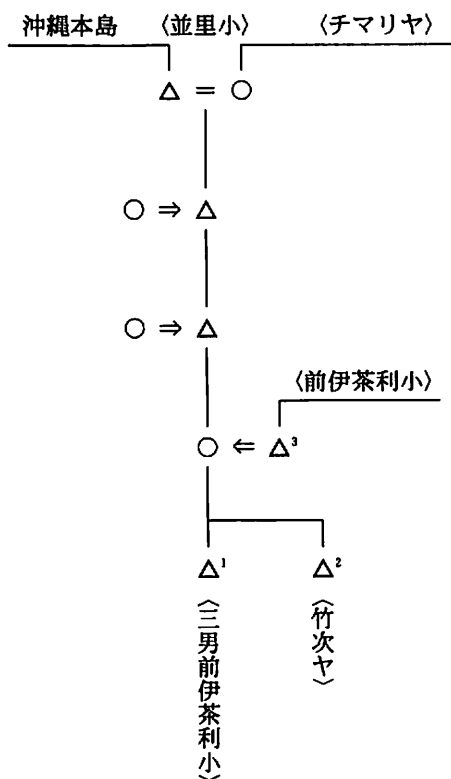


図 1

ブッチを準備する役目は<ウブシミ>がやることに決まっています、また、X組では米の徴収が行われる場所（家）が毎年<東ン門>と決まっています。<ウブシミ>も<東ン門>も、ムトゥ神を祀る旧家（ムトゥ）である。しかし、それ以外の組ではそのような中心となる家はなく、米を集めマブッチを準備する役目は、家の輪番制をとっている。かつて個々のマブッチ組に家の系譜関係の認識に基づくなど、何らかの理由によって中心的位置を占める家があって、組が何らかの社会的・宗教的意味を有していた可能性を想定し

てみる必要があるが、しかしそれにしても、マブッチ組に関わる聖地や神役などは存在せず、その機能は初穂祭における供物の供出に限られることに留意する必要がある。地縁の紐帯によって構成されている、と推定できる組の存在も想起したい。

つぎにヤドゥイについて見てみよう。ヤドゥイは7つあり、それぞれの名称は、トゥヌチ、外間、チバイ、ンギャナ、メーマ、ンナントゥ、イキンである。ヤドゥイ名称の由来については、屋号と一致する例（外間、チバイ）も含めて聞くことができない。ヤドゥイの構成についても表1に示してあるが（1軒だけで構成されるイキンヤドゥイは表中に表れていない）、マブッチ組の構成とも異なる。分家は本家と同じヤドゥイに属するのを原則にするというが、1つのヤドゥイが1つの門中によって構成されるという例はなく、同じ門中を構成する家々が別々のヤドゥイに属する事例があったりする。たとえば、ミンダカリ門中（2）の例で見ると、〈ミンダカリ〉と〈メーダカリ〉が外間、〈後越来〉がンナントゥ、〈久高ノ口殿内〉がトゥヌチヤドゥイへの所属になっている。いかにして今日のようなヤドゥイ構成になったのかについては、島の当事者たちにも説明できない状況にある。

ここで確認しておきたいのは、アミドゥシのヤドゥイも、マブッチ組と同じようにアミドゥシという祭祀の場面以外では何ら社会的機能を果たすものではないという事実である。どのヤドゥイにも、アミドゥシにおいて特別な役割を担うといった特定の家は存在しないし、ヤドゥイに関わる神役もない。

四 結び

沖縄各地の村落祭祀が、門中およびそれに類する親族（祭祀）集団を下位単位として構成・運営されている状況については、本稿の冒頭で触れた通りである。

本稿では、久高島の村落祭祀で供物の供出単位となっている地割組、マブッチ組、ヤドゥイの構成原理について検討してきたが、その結果、それらは他の地域で村落祭祀の下位単位となっている諸集団とはほど遠い性格のものであることが明らかになった。マブッチ組とヤドゥイの構成のあり方に関しては、家の継承において排他的に父系イデオロギーを重視するのは近年の現象であること、さらに、家産の定立が妨げられる地割制下における流動的で非永続的な久高の家に関する事情〔赤嶺 1984〕をその背景の一つとして考慮する必要があるだろう。

久高島には、門中と呼ばれる親族集団が存在するが、それが近代のある時期に形成されたものであり、かつ今日の門中が村落祭祀の下位単位を構成するという状況は見られないこと、さらに、門中形成以前に、たとえば座間味島における御嶽所属集団や渡名喜島の殿所属集団に比定されるような何らかの出自集団が存在したことは想定しにくいといった問題については、別稿〔赤嶺 1983〕で検討した通りである。

<参考文献>

赤嶺政信

1983「沖繩久高島の「門中」制—久高島村落祭祀組織理解のための予備的考察—」『民族学研究』47-4、日本民族学会

1984「地割制社会における家—久高島の事例を通して—」『沖繩民俗研究』5、沖繩民俗研究会

1993「久高島の祭祀組織—門中制との関わりを中心に—」『沖繩久高島のイザイホー』砂子屋書房

1998『シマの見る夢—おきなわ民俗学散歩—』ポーターインク

伊波普猷

1975 (1918)「古琉球における女子の地位」『伊波普猷全集』7、平凡社

大胡欣一

1962 「北部沖縄の社会組織－伊平屋島字田名の社会人類学的研究－」『民族学研究』27-1、日本民族学会

比嘉政夫

1983 『沖縄の門中と村落祭祀』三一書房

比嘉康雄

1993 『神々の原郷久高島』下、第一書房

松園万亀雄

1970 「沖縄座間味島の門中組織」『日本民俗学』71、日本民俗学会

村武精一

1965 「琉球社会組織に関する若干の問題」東京都立大学南西諸島研究委員会編『沖縄の社会と宗教』平凡社

山路勝彦

1967 「沖縄渡名喜島の門中についての予備的報告」『日本民俗学会報』54、日本民俗学会

1984 「沖縄佐敷村屋比久部落の門中組織」佐敷町史編集委員会編『佐敷町史2 民俗』佐敷町役場（初出は『伝承文化』8、1973）